巻頭説教

「救いの衣を着せられる幸い」

イザヤ書 61 章 10 節 ヨハネによる福音書 19 章 16 後半～27 節

牧師 小野寺 泉

はじめに

今朝は、皆さんと御一緒に、ヨハネによる福音書 19 章 16 節後半から 27 節を読みました。そこには、主イエスが十字架にお架かりなことが語られていました。

I

この箇所を読みますと、どなたもマタイ・マルコ・ルカの共観福音書と違っているという印象をもたれるかと思えます。特に印象的な「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのか」という主イエスの絶望の叫びの記事がありません。それだけでなく、ここで語られております五つのエピソードも、ヨハネ福音書独自のものなのです。そのようにして全体として十字架の救いのメッセージを語っているのです。

その五つというのは、第一に主イエスが自ら十字架を担ってゴルゴダへ行かれたこと(17 節)、第二に、主イエスは二人の罪人の真ん中に、十字架にかかっておられること(18 節)。第三に、主イエスの十字架の罪状書きは「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」とあって、それがヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれたこと(20 節)。第四に十字架刑の番をする兵士たちが、主イエスの衣服をわが物としていること(23 節)。そして第五に主イエスが十字架から、母マリアに対してある愛弟子が子であること、また愛弟子に対して母マリアがあなたの母であるということ(25～27 節)。このような五つのエピソードを淡々と語ることで、主イエスの救いを明らかにしているのです。主イエスの一つひとつの歩みが、救いを告げているからなのです。

II

まずヨハネ福音書は、主イエスが十字架を自ら背負ったと告げています。他の福音書には、クレネ人シモンが十字架を担って助けたという記事があります。が、ヨハネ福音書はそれを省略しているのです。そのことによってイエスご自身が十字架を背負ってくださったということを強調しています。それは、もちろん、ユダヤ最高法院に代表される人間の罪を主

イエスはまさしく御自分の事柄として引き受けたということに他なりません。実に、神は、主イエスにおいて、人間の罪を御自分の問題としているのです。だからこの世界のどのような罪も、主イエスにおいて、神が担っておられるというのです。あるいは神が知らないような罪は存在しないといってもよいのです。

そしてことは第二に、二人の罪人が主イエスを真ん中にして両側に付けられたことで、さらに強調されています。神は、主イエスにおいて、わたしたち罪人の只中に来てくださり、わたしたちの罪を担っておられることを知らせておられるのです。

第三に、こうして主イエスの十字架の罪状書きには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と記されたことが、大変な意味をもってきます。ユダヤ人の真の王である主イエスは、この世の世俗的な国王とちがって、罪からの救いをもたらすという仕方です。

ところでこの罪状書きはヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていました。ヘブライ語はユダヤ人の言葉です。聖書はヘブライ語で書かれており、また当然、祈りもヘブライ語でしたわけです。

ラテン語は当時のイスラエルの地を支配していたローマ人の言葉ですから支配の言葉といえます。

ギリシア語は、4 世紀にアレクサンダー大王が地中海世界を支配して以来、全世界の共通(コイネー)の言葉でした。

そうして見ますと、真の王である主イエスの罪からの救いによるご支配は、ユダヤ人である弟子たちだけに及んでいるのではなく、彼らの世界の隅々にまで及んでいるということを告げています。言い換えると、主イエスの罪からの救いによる御支配は、わたしたちが知っている世界を越えて、わたしの知らない世界にまで進んでいくものである、ということです。

III

ところでヨハネ福音書は、これまで主イエスの十字架を見つめてきましたが、今度は十字架の側に

いた番兵たちについて語るのです。この兵士たちは誰よりも主イエスの十字架の側にいましたが、それを見ることなく、主イエスの持ち物である衣服に注目していました。つまり主イエスの罪の赦しによるご支配ではなく、この世も見ているということなのです。

もちろん当時のローマ兵の実情にあわせて言えば、十字架刑の番兵の仕事は、決して喜ばしく、また兵士として誇らしい仕事ではなく、辛い仕事であったでしょう。何しろ民衆の悲しみと憎しみを直接受けるのは彼らだからです。だからその仕事のいわゆる「役得」として処刑された罪人のもちものである衣服を分け合ったり、一枚の布の下着をくじ引きで決めて自分たちのものにしたりますのは、容認されていたことでした。

しかし聖書は、ただ当時の事情を語るだけではありません。十字架の救いの側においても、役得のようなこの世の利益のみに注目する姿を活写しています。その姿を見て、今日のわたしたちは愚かしいとか浅ましいとか非難できないのでしょうか。というのは、今日のわたしたちも十字架の救いの側においても、主イエスの十字架を救い見るのを止めるとき、このローマ兵と同じく主イエスの救いではなく、遺品や記念品のようなこの世の益に関心を寄せ、それをわが物としようとしてしまうのです。

しかもヨハネ福音書は、そのような愚かさも含めて、旧約の預言の実現であるといっています。

『それは、「彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた」という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである』(24 節)

そのように言われています。つまりローマ兵のような愚かさを持つ者たちも、何と、神によって、主イエスの救いの御業の中に含みこまれているのです。

IV

そこで最後に主イエスは十字架上から母マリアに声かけ、御自分の愛する弟子を「御覧なさい。あなたの子です」といい、また愛弟子に声をかけ、「見なさい。これはあななの母です」といっています。これは、主イエスが、御自分が死んだ後、母マリアの行く末を案じて、愛弟子にお世話を命じたというようなことではありません。ここには、新しいことが起こっています。それは、血縁関係を越えて、信仰による家族の成立であり、教会が成立なのです。

すでにヨハネ福音書の最初で次のようにいわれていました。「しかし言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格をお与えになったのである。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってでもなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」(ヨハネ 1:12~13)

そのようにいわれていました。今、主イエスは十字架の救いをもたらしつつ、母マリアと愛弟子に対してお互いを見るように促したわけです。だからマリア多たちは主イエスのほうに向けていた目をお互いの方に向けたわけです。そのお互いに血縁関係はありません。しかし主イエスによって救われたという共通点があるのです。それを礎にして、新しい母と子の関係が成り立っているのであり、神の家族としての教会が成り立っているのです。

人は、主イエスの十字架の救いの側においても、その救いの恵みを見ないとき、「衣服」に代表されるこの世の益を中心として家族関係を維持しようとするのかもしれませんが。しかし主イエスの十字架の救いにあずかるとき、わたしたちはかつてイザヤいったように救いの衣を着せられた者たちなのです。

**「主は救いの衣をわたしに着せ
恵みの晴れ着をまとわせてくださる」**

イザヤはそのように預言しました。その御言葉のとおりにならないうちは、主イエスの救いあずかって、主イエス・キリストを着せられた者たちです。後に使徒パウロは「主イエス・キリストを身にまといなさい」と勧め(ロマ 13:14)、「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」(ガラ 3:27)といいました。ですから、もはや地縁・血縁関係をベースに交わりを結ぶのではなく、主イエスの十字架の救いが交わりのベースなのです。このようにしてわたしたちは、救いの衣を着せられた、新しい神の民として歩み出すのです。

(2025年7月6日主日礼拝)

信徒による礼拝説教奉仕について。

小野寺泉

はじめに

現在、富良野伝道所は、毎月一回、美深伝道所の礼拝説教応援をしている。牧師が美深に出張のさいには、伝道所委員が礼拝説教原稿を代読して礼拝を守っている。そのため毎月第二週には委員たちと礼拝説教準備会を三回行い、説教原稿代読に備えている。こうした現状を踏まえ、改めて「信徒による礼拝説教」について考えてみたい。

I

わたしたち教会は長老制の教会であり、説教は宣教長老である牧師の「語る務め」に属する。治会長老である長老・委員は教理の擁護のため、福音が語られているかどうか説教をちゃんと聞き分けるという「聞く務め」にあずかる。「治会」とは、御言葉であるイエス・キリストが教会を治めてくださっていることを指し、その働きにあずかることだからである。

しかしここ数年、教会員・教職の減少、また無牧師の教会の増加に伴い、治会長老が「語る務め」を兼任することが起こってきている。そのため長老の中には、教職ではない者が「語る務め」にあずかることは正しいことかと疑問と戸惑いを覚える者もある。確かに「務め」という観点から見ると、牧師が説教を担うべきであり、長老はそのような務めをしてはならない。

しかしそうはいつても、牧師の数が減少しているのであるから、不本意でも長老が「語る務め」を担わねばならなくなっている。では、牧師の減少という実情に合わせて、仕方なく長老も「語る務め」をするということなのだろうか。わたしは、そうではないと思う。そこで信徒である長老・委員が「語る務め」に与る理路を確かめてみたい。

II

そこで牧師や長老の「務め論」という人間の側から出発するのではなく、そもそも聖霊による教会の誕生という神の御業から見つめたい。

教会の成立は、ご存知のようにペンテコステにある。聖霊が注がれ教会がこの地上に生み出されたわけである。では、聖霊の注ぎということは何が見つめられているか。その点を使徒言行録2章にもとづいてみると、明らかに、聖霊の注ぎは、神の偉大な御業を語ること、聞くことという言葉の出来事である。つまり主イエスの復活が語られ・聞かれるという終末的な出来事が起こったわけである。したがって説教とは、地上に目に見える教会の多様な働きの一つではなく、新しい神の民である教会の存在そのものを生み出す神の恵みに他ならない。説教という出来事が起こり、礼拝が成立し、教会が産み出されるのである。

ところでこうした説教の優位を一番明瞭にした

のは、カール・バルトであった。彼は邦訳『教会教義学』I/1の中で、以下のように、神の言葉の三形態を論じている。

①啓示された神の言葉：イエス・キリスト

↓

②書かれた神の言葉：聖書

↓

③宣教された神の言葉：説教

ご覧のように、バルトは神の言葉の三形態を論じているが、それは何よりも説教を論じていることが明瞭であろう。

③の説教は、根源的に、①のイエス・キリストが神の言葉を啓示しておられるという恵みを出発点にしている。つまり説教とは、わたしたち人間の業である前に、根源的に主イエスの宣教の御業のことなのである。

②とところでその恵みは、どこか天の高みや地の深みに捜すのではなく、極めて明確に預言者と使徒のキリスト証言によって与えられている。しかも幸いなことに、それらのキリスト証言は聖書という書かれた神の言葉において、わたしたちの近くに与えられている。

③それゆえに、教会は聖書の学びをとおして預言者と使徒のキリスト証言を聞き分け、イエス・キリストが神の言葉を啓示しておられるという恵みに与って説教する。説教は間違いなく宣教された神の言葉である。そしてこうした一連の働きは聖霊によってのみなされることである。

以上のような観点から言えば、説教は、地上の教会の営みの一つである前に、聖霊の働きであって、いわばイエス・キリストが真の預言者として説教しておられることに基づく。教会は感謝と畏れと喜びをもって、そのキリストの御業に仕えるのである。

III

したがって教会は、「語る務め」に与る宣教長老としての牧師がいない場合も、説教の業にあずかる。主イエスが真の預言者として説教のお働きを止めてしまうことはあり得ないからである。だから無牧師の教会であっても、「語る務め」は教会に与えられ続けている。

では、その「語る務め」を担うのは誰か。それが教会の「小会」・「委員会」である。

「小会」・「委員会」は、中会が派遣した教師や近隣の牧師の指導のもとで、「語る務め」を担うわけである。そのやり方には、説教原稿を代読する場合、説教集から選んで説教する場合、さらに自ら黙想・釈義・説教原稿作成をする場合などがある。それは、それぞれの群れの状況や成熟度に応じて行ってよいことである。いずれせよ、信徒による説教の根拠は、主イエスの宣教のお働きが与えられているという幸いにある。

***~**~*~*~*~*~*~*7月 定期委員会報告 *~**~*~*~*~*~*

I. 6月の教会の歩み

- 6月1日(日) 主日礼拝 聖餐式執行
- 6月4日(水) 聖書を学び祈る会
- 6月7日(土) 定期委員会
- 6月8日(日) ペンテコステ礼拝
キリスト教入門講座
- 6月10日(火) 礼拝準備会①
- 6月11日(水) 聖書を学び祈る会
- 6月12日(木) 礼拝準備会②
- 6月14日(土) 礼拝準備会③
- 6月15日(日) 主日礼拝 代読:委員宮川美加
- 6月17日(火) 公開学習会 於札幌琴似
- 6月18日(水) 聖書を学び祈る会
- 6月19日(木) 求道者のための読書会
- 6月22日(日) 主日礼拝 会堂清掃
- 6月24日(火) 求道者のための読書会
- 6月25日(水) 聖書を学び祈る会
- 6月29日(日) 主日礼拝

◆6月の集会統計 (平均人数、備考欄は延べ人数)

	男	女	計	備考
主日礼拝	2.0	5.2	7.2	求道者:2 他教会:4
祈る会(昼)	2.0	0	2.0	求道者:1
祈る会(夕)	1.0	1.0	2.0	
入門講座	2	5	7	求道者:1
讃美歌練習	-	-	-	

II. 主な決議事項

1) 2025年8月礼拝説教箇所・各礼拝奉仕者について、以下のように決めた。

日	聖書箇所	説教者	報告者	奏楽者	献金	受付
3	ヨハネ19:8-37	小野寺泉	田畑有希子	狭間希望	杉山綾子	宮川美加
10	マルコ5:21~43	小野寺泉	宮川美加	宮川美加	田畑有希子	杉山綾子
17	創世記3:1~7	杉山綾子	宮川美加	宮川美加	宮川美加	田畑有希子
24	出エジプト20:1~12	小野寺泉	杉山綾子	狭間希望	田畑有希子	宮川美加
31	出エジプト20:13~21	小野寺泉	田畑有希子	田畑有希子	宮川美加	杉山綾子

8月 聖餐式奉仕者 パン:田畑有希子 杯:杉山綾子

- 2) 8月17日:奉仕者 委員杉山綾子
準備会 12日(火)、14日(木)、16日(土)
- 3)・召天者記念礼拝

日時 8月10日(日)午前10時半
聖書 イザヤ書53章4~6節
マルコによる福音書5章21~43節
説教 「起き上がって歩み出す日」

・墓前祈祷会

日時 8月10日(日)午後1時30分
於日本キリスト教会富良野教会納骨堂
聖書 コリントの信徒への手紙一 15章35~49節
説教 「復活の主イエスの似姿にされる幸い」

- 4) 会友狭間希望の奏楽奉仕を、感謝をもって承認した。

III. 6月の教会会計報告

収入の部		支出の部				
科目	金額	科目	金額			
献金	1.礼拝献金	31,685	謝儀	1.礼典費		
	2.維持献金	64,000		2.基本謝儀	210,900	
	3.感謝献金	16,000		3.研究費	19,500	
	4.供出献金	8,000		4.特別謝儀	210,900	
	5.特定献金	42,000	◆小計	441,300		
	6.会堂営繕	12,000	集会費	6.日曜学校費	-	
◆小計	173,685	7.諸集会費				
補助	7.中会補助	-	◆小計	-		
	8.教職補助		管理費	11.光熱水費	13,345	
◆小計	-	12.通信費		14,479		
その他	12.牧師館費	10,000		17.修理費	1,590	
	13.雑収入	-		19.厚生費	32,263	
	14.預り金	72,948		23.会堂建築積立	-	
◆小計	82,948	24.会堂営繕積立		-		
大・中会個人献金	16.中会受難週	1,500		25.退職積立	-	
	17.中会教職B	2,000		◆小計	61,677	
	18.中会ヤスクニ	-		その他	29.預り金(社保)	31,471
	19.中会秋伝道	-			30.予備費	
	20.大会伝道局	6,000	◆小計	31,471		
21.大会ペンテ	-	大会・中会	36.日曜学校日	-		
22.大会共助B	-		40.中会受難週	-		
◆小計	9,500	◆小計	-			
◆当月収入計	266,133	◆当月支出計	534,448			
◆前月繰越金	265,638	◆次月繰越金	△2,677			
合計	531,771	合計	531,771			

【維持献金】大島昭代(3~6)、杉山綾子(6)、田畑有希子(6)、平間早苗(5・6)、宮川美加(6)、小野寺泉(6)、本間一美(6)【会堂営繕】大島昭代(3~6)、杉山綾子(6)、田畑有希子(6)、平間早苗(5・6)、宮川美加(6)、本間一美(6)【供出金】杉山綾子【感謝】杉山綾子、田畑有希子【特定献金(ペンテコステ)】大島昭代、杉山綾子、田畑有希子、平間早苗、宮川美加【中会受難週】大島昭代【中会教職B】大島昭代、杉山綾子、宮川美加、本間一美【大会伝道局】大島昭代、杉山綾子、宮川美加、本間一美

《編集後記》 ◆早いもので七月も終わる。この月の終わり頃、北海道が最高気温 40℃になるという予報がだされた。果たして富良野は 37℃を記録した。が、このことについて温暖化や異常気象など話は、あまり聞かれなかった。何故だろう。◆7月20日は参議院選挙が行われた。自公が過半数割れになった(与党 122、野党 126 議席)。その後、若干、動きがあるようだが、目立つのは旧安倍派の後退であり、参政党などの自称保守勢力が議席を獲得したことである。安倍政権が「戦後レジーム」からの脱却をいい、この国の議会の常識からも脱却して独裁に近づいたが、その余波がまだあるのかもしれない。しかし今は、戦後の日本国憲法にもとづいて国家・社会・暮らしを立て直していくことのほうが大事である。特に戦後 80 周年を迎える。先の大戦における加害・被害の両方を見つめつつ、日米関係を見直すときが来ている。◆トランプ政権の米国は「エプシュタイン事件」の影響で支持者の半分を失いつつあるという。この政権に対して米国民が審判をくだす日もそう遠くはないと思われる。そうであればこそ、憲法に立って日米関係を見直すべきではなか(泉)。